

- e. 総括班事務局運営費（以上の研究活動にかかわる一切の事務） コンピュータ購入費・謝金

調整班研究A01「原典」

調整班代表 池田 知久

研究目的

- (1) 目的：第1，各文明における原典の状況を全体的、文化横断的に解明。第2，最近半世紀間の各分野における古典学の総括及び古典学全体に対する総括。また古典の新たな日本語訳を作る試み。第3，古典伝承（口承・抄写）の一般理論を確立。第4，原典の内外における写本・版本の所在の調査，電子機器を用いたそのデータベース化。共同利用の電子機器の購入。
- (2) 特色：各文明における原典の状況をふまえた古典についての全体的、総合的な研究。近半世紀の古典学全体に対する総括の上に立った新たな古典学，特に伝承の一般理論の確立を目指すもの。
- (3) 位置づけ：国内外では各分野における原典研究は著しく進展しているが，本研究計画のような全体的、総合的な研究はいまだかつて提起されたことがない。
- (4) 準備状況：本研究課題に密接に関連した課題で代表者及び分担者が従来受けた研究費はないが，平成9年度以来精力的に準備作業を行って今日に至っている。

研究計画・方法

1. 年3回研究会議を開き「目的」の第1～第4について検討する。やや多額の旅費・謝金・会議費が必要。11年度は主に「目的」第1の各文明における原典の状況の相互理解及び「目的」第4の内外における原典の調査結果の報告等に重点を置き，西洋・イスラム・朝鮮等については各1名の専門家を招聘して意見を聞く。会議では代表者・分担者の全員が専門に基づいた報告を行い，成果は「古典学の再構築」のニューズレター等に掲載。役割分担は池田が全体の統括と中国，五味が日本，高橋が南インド・タミル，御牧がチベット，間野がチャガタイ・トルコ語，ペルシア語の古典をそれぞれ担当する。
2. 「目的」第4に沿ってCDリライタブル・オーバーライトMOドライブを購入し蒐集したテキストの電子化等を進める。
3. 「原典」班に関わる事務を処理するためアルバイト職員を雇用する。
4. 他の古典諸学との協力・連携を求めて国際シンポジウムを開催する。

調整班研究A02「本文批評と解釈」

調整班代表 関根 清三

研究目的

1. 調整班研究「本文批評と解釈」の研究目的は，日本・中国・チベット・インド・イスラエル・イスラム・西洋の諸古典学が結集して，本文批評と解釈の，新しい理論と実際を提示することである。2. 従来の古典学では，その方法論に潜む価値観（例えば近代西欧特有の自然観や人間観など）が古典本文の客観的な読みを阻害する傾向が少なからずあり，また近年急速に発達してきたコンピューターの総合的な利用法について十分な検討がなされて来なかった。3. 本調整班研究の学術的特色・意義はさしあたって，この二点の不備を補い，諸古典本文固有の論理を客観的に記述する視座を創出すること，またコンピューターを駆使した古典解釈学の標準を確立し，これを普及させること，に存する。しかもそのために，近代古典学の歴史上初めて，諸古典学の連携を実現し，過去の成果と方法論的反省を共有しつつ，新しい古典像創造の作業を共同して行うのである。我が国は，現在，古典学の全主要領域に高水準の研究者を擁するが，このような国は他に例を見ず，古典諸学全体の連携による古典学再構築は，日本の古典学のみがなしうる国際的貢献となる。加えてこのような貢献は，新しい古典学の成果と新しい日本語訳の公開につながり，現代日本文化の基層を一層堅固なものとなし，その一段の深化に資するはずである。こうした目的のために過去2年間，4. 「基盤研究」「特定領域研究」総括班研究による準備がなされており，既に30頁にわたるニューズレター等でその成果は公にされている。

研究計画・方法

1. 「本文批評と解釈」調整班の基本計画としては，(1) 「古典本文」の範囲を，原則として中世までとし，状況に応じて柔軟に考えること，また人文科学に限らず，法律等，社会科学の対象をも含むこと，(2) 諸領域の古典学の恒常的交流を実現すること，(3) 諸領域共通の「解釈」の問題を中心に，研究成果の公開を行うこと，などが挙げられる。
2. 研究組織・方法としては，「本文批評と解釈」の研究項目について，日本，中国，チベット，インド，イスラエル，イスラム，西洋の7分野の専門家たちによって，共同研究をするものとする。それぞれの領域の研究分担者および公募研究代表者たちが毎年度成果を発表し，調整班代表者はそれらの発表の場について企画し，会議お

よび何らかの報告書の形で取り纏める。なお調整班の研究者はそれぞれ大学に籍を置き、既に当該領域の図書およびコンピューターなどの設備を充分保有しているので、この点への支出は行わない。

調整班研究A03「情報処理」

調整班代表 徳永 宗雄

研究目的

デジタルテクノロジーの急速な発達にともない、人文学の領域でもコンピュータを利用した研究が日常化しつつある。古典研究においても事情は同じで、デジタル資料の蓄積が進むとともに、これを使った研究がこれまでには見られなかったタイプの研究成果を挙げつつある。しかし、一方では、研究者各人がそれぞれ異なった仕方ではコンピュータを使用しており、利用法に無駄が多いのが実情である。また、入力データの共有も未だ充分に実現しているとはいえない。このような状況を打開するために本調整班では徳永宗雄、安永尚志、及川昭文、村上征勝を代表者とする4計画研究を行う。

本調整班研究の第一の目的は、「情報処理」調整班の上記計画研究者とこれから参加してくる公募研究者を有機的に連関させるべく、各班員と公募研究者に情報交換の場を提供して、その意思の疎通を図ることにある。第二の目的は、ホームページ等を運営して、特定領域研究「古典学の再構築」のニューズレター『古典学の再構築』をリアルタイムに公開し、各調整班研究、計画研究、公募研究の活動を広く国内外に紹介することにある。つまり、本調整班研究は、特定領域研究「古典学の再構築」情報公開のためのインフラストラクチャの整備と運営を主たる任務としている。その他に、本調整班研究は、古典文献データベースの作成を促進するために、まだデジタル化されていないインド古典文献の一部のデジタル化を予定している。

研究計画・方法

前ページに述べた目的に沿って、すでに本調整班では実験的に文字処理問題に関する電子掲示板とメーリングリスト(db@g54104.sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp. 近く他に移動の予定)を開設し、本特定領域研究に関わる研究者による意見交換の場を提供している。また、近く、ニューズレター『古典学の再構築』1のホームページを試験的に公開する準備を進めている。

本調整班研究の平成11年度の計画は以下の通りである。「情報処理」調整班と特定領域研究「古典学の再構築」の情報インフラストラクチャの整備と運営が本研究の主な任務であるため、研究費の大半はその目的のために使用される。

- 特定領域研究「古典学の再構築」ホームページ等開設のためのサーバの整備(消耗品「フロッピーディスク、ソフトウェア等、パソコン周辺部品の購入」、専門的知識の提供)(なお、業者によるホームページ等作成に関わる費用は総括班から支出の予定。)
- 古典文献入力作業(図書費、謝金)
- 古典文献デジタル化に関する情報収集(旅費)
- 総括班本部、調整班班員との意見交換(通信費)

調整班研究A04「古典の世界像」

調整班代表 内山 勝利

研究目的

(1) われわれの調整班(A04「古典の世界像」)は、古典各分野の緊密な連携に立って、その文献学的成果を集約しつつ、古典作品を媒体として、極力新たな視点からそれを据え直し、「現代に生きる古典」としての新たな可能性を引き出すことを目指すものである。こうした試みを効果的に遂行するために、具体的な共同研究を通じて方法的基礎を確立することに努めるものとする。そのためには、まず多様な古典世界を共通の基礎にのせて、真に有意義な比較・総合を行いうる場と具体的手続きを再検討することから始めなければならないが、むしろ実際には、そうした見通しの立ちうる問題をめぐると共同研究・討議を通じて、同時に方法的一般化への有効な示唆を探ることによって、進展を期したい。当面想定されるテーマとしては、国家と宗教、自然観と技術論、言語論、時間論および空間論などがある。

(2)(3) 一般的にきわめて高レベルにある各古典領域での成果の有機的な連携を図り、それを相互につきあわせることが大規模かつ組織的になされることは、おそらくはじめての試みであり、これ自体が日本の古典学の層の厚さのみのなしうる国際的貢献であり、当調整班研究は、その中核を担うものとして、不可欠の位置を占めるべきものである。

研究計画・方法

平成11年度においては、現在着手している比較研究的

テ・マ、すなわち各古典領域ごとの「学」の理念とそれぞれに固有の学問的分野のカテゴリ - を明らかにし、その特質を比較することから、分野横断的研究への可能性と方法を探る糸口とする共同研究をさらに継続するとともに、その延長上に、上掲5項目の課題ないし現在進行中の討議の中から生じてくるであろう重要項目のいずれかを、研究組織の各自が分担的に担いつつ、高次の比較の考察への示唆を提供するよう努めるものとする。そのために、調整班としての研究会を年間2ないし3回開催し、分野間の有機的交流と具体的な議論のつき合わせに努める。本年度においては、その成果は、経過段階的なものとなるが、一定の論点揭示として、当特定領域研究の発行する雑誌『古典学の再構築』に順次掲載発表するものとする。

以上のような計画から、研究経費の主たる使途は国内旅費に当てられる。その他の費目も研究会の開催とそれに要する準備的研究のための経費や通信連絡などの事務的経費である。なお本調整班研究のための事務は、代表の内山のもとで一括して行うものとする。

調整班研究B01「伝承と受容（世界）」

調整班代表 江島 恵教

研究目的

本研究は、従来等質的なものとして固定化されがちであった「ヨーロッパ文化」「アジア文化」と言った「文化的統合体」を一旦解体した上で、(1)古典の「伝承」過程そのものをある特定文化圏内での具体的歴史的事実に即して分析しなおし、(2)ある特定文化圏の古典が異文化圏において「受容」される過程・形態を文化横断的に考察し、(3)それを通じて、一般的・普遍性をもった新しい「古典学」を再構築することを目的とする。あわせて、調整班研究として、複数の研究者が各自の研究領域の枠組みを超えて、従来の細分化された古典学を再考察・批判することによって、また、関連する計画研究・公募研究の統合化を計ることによって、新しく「古典学の再構築」を試みる点に研究の特色と独自性がある。日本における高度な専門研究を前提とした本研究は、その目指す総合性の面で、国内外において重要な位置づけを獲得しうるものである。

この研究目的を遂行するために、10年度においても2回の調整班全体会議を開催するなど、研究の準備を整え

つつある。

研究計画・方法

本調整班研究は、独自の研究計画を遂行するとともに、計画研究・公募研究の組織化についても多大な責任を負う。その11年度計画の概要は以下の通り。

11年度は、研究目的遂行のために、調整班全体会議を最低2回もち、班員以外の少数の研究者による協力を得て古典の「伝承と受容」についてのシンポジウムを1回開催する。それによって、将来の研究についての具体的展望とより緻密な研究計画の立案に当たる。

これによって12年度以降における調整班独自の研究計画を具体化し、調整班に関係するその他の計画研究・公募研究の成果の集成、組織体系化への準備を整える。

調整班研究B02「伝承と受容（日本）」

調整班代表 木田 章義

研究目的

外国文化は常に日本文化の変容と充実のきっかけとなった。日本文化は外国文化の消化と吸収を通じて、その形を変えてきた。それは通史的にみると、すべての時代に共通したテーマとなるが、本研究では、中世に重点をおいている。その理由は、影響を与えた外国文化が一つではなく、キリスト教を通じての西欧の文化、禅宗を通じての中国の文化などと同時に、和冠を契機とした中国での日本研究など、さらに文禄の役などから引き起こされた朝鮮での日本研究などさまざまな視点から、日本の中世を捉えることができるが、こういう研究が、体系的になされていないこと、さらに、研究者の数も、前代に比べて圧倒的に少なく、その知識の集積もはるかに少ないからである。

研究計画・方法

本研究では、四回の会議を開催する予定である。その会議における討議を通じて、各研究が相互に内容を理解し、より高度な、体系的なものになるように、互いの研究の内容や方法を変えて行くようにする。計画研究と公募研究との相互の意志疎通ができあがってからは、研究分野に重複があれば、重複を避けるように調整し、研究分野に不足があったり、欠けた部分があれば、分野の範囲を広げるという調整をする。そしてできる限り、中世における外国文化との接触の全体を明らかにするようにする。第一回の会議では、各研究の行っている概略を了

解する。第二回では各研究の問題点、不足点などのついでに討議を行う。第三回では、第二回の討議の結果をふまえて、それぞれの研究の修正をおこない、第三回でそれを発表する。最後に第四回で最終的な調整を行う。

調整班研究B03「近現代社会と古典」

調整班代表 中川 久定

研究目的

5人の計画研究代表による特色ある研究を、互いに関連させ、全体として古典テキストがヨ・ロッパやアジアの近現代社会においてどのように読まれ、それぞれの社会でどのような役割を果たしてきたかを明らかにすることが、本調整班研究の目的である。

具体的には次の二点に集点を絞った共同研究を行う。

1. 社会における古典の教育・伝承システムのあり方の研究
2. 古典の読み方の新展開の解明

研究計画・方法

1) 研究分担者各自が相互の研究内容に対する理解を深めることができるように、分科会形式の研究会を2回、全体の研究会を1回少なくとも開催する。これによって本調整班の研究目的や計画を確認し、次年度以後、共同研究が円滑に行われるようにさらに課題の絞り込みを行なう。

2) 本調整研究に属している研究分担者の専門は、西洋学とイスラム学に限られているので、同様の研究を行っている他分野の研究者を複数招き、相互に意見を交換する場を設定する。

専門研究

A01 『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法

研究代表者 五味 文彦
東京大学人文社会系研究科 教授

研究分担者 安田 次郎
お茶の水女子大学文教育学部 教授
近藤 成一
東京大学史料編纂所 助教授

今村 みよ子
東京工芸大学女子短期大学部 助教授

田淵 句美子
国文学研究資料館 助教授

桜井 陽子
熊本大学教育学部 助教授

本郷 和人
東京大学史料編纂所 助手

尾上 陽介
東京大学史料編纂所 助手

高橋 慎一郎
東京大学史料編纂所 助手

菊池 大樹
東京大学史料編纂所 助手

井上 聡
東京大学史料編纂所 助手

高橋 典幸
東京大学史料編纂所 助手

小川 剛生
熊本大学文学部 講師

研究目的

日本の古典学の再構築という視点から、中世で重要な位置を占めている『明月記』と、『吾妻鏡』の写本研究を行うものである。この二つの古典を選んだのは、中世に古代の古典を研究して王朝文化の再興とその咀嚼を試みようとした代表的人物が『明月記』を著した藤原定家であったこと、その『明月記』などを原史料として編纂されたのが『吾妻鏡』であり、江戸時代になって広く読まれ、研究されるようになったことなどによる。本研究ではまず写本研究を行うことで、中世の古典学がいかに築かれたのかを改めて問い、また近世の段階で写本がいかに形成されたのかを考え、さらにその現代語訳などの方法についても考察を進めてゆくことで、今日の段階における古典学の方法と意義を問い直したい。『明月記』は最近になって冷泉時雨亭叢書として影印本が刊行されることとなり、その原本と写本との関係がようやく明らかにされつつあることから、底本をつくり、写本をも広く収集して、原本と写本との関係を徹底的に探ってゆく。従来の『明月記』の研究は、本研究代表者の五味の主催する明月記研究会が精力的に写本研究や注釈、現代語訳を進めてきており、雑誌『明月記研究』には関係の研究論文を多数載せてきており、その成果の上に立って研究を行いたい。『吾妻鏡』は編纂物である性質上、編纂上の誤りが多く見えることから、その記事がいかに形成されていったのかという視点に立って、写本を広く集め、本文研究を進めてゆく。これまでの鎌倉幕府の政治史の理解のための研究の成果を吸収しつつ、古典学の方法を考える側面から研究を行ってゆく。本研究代表者の五味の『吾妻鏡の方法』が先鞭をつけており、その延長上で